N.S.ニュース速報A

NSDAP/AO : PO Box 6414
Lincoln NE 68506 USA
www.nsdapao.org

#1133 01.12.2024 (135)

白人種の知られざる英雄たち

パート6

ウォルト・ディズニー

自分の人生の物語をマーレ・エリオットに書かれたくはないだろう。たまたまマルクス主義のユダヤ人であったり、ユダヤ人を愛する人種反逆者であったりすれば話は別だが。当然のことながら、自尊心のある白人は、このチョップジョブ伝記作家の手による公正な扱いを期待することはできない。しかし、あなたがまだ生きている間は、エリオット氏のような人物を恐れることはないだろう。なぜなら、エリオット氏は死者の評判を食い物にする "政治的に正しい "新種のハゲタカの一人だからだ。本のために論争を巻き起こす（論争＝売上）安上がりで簡単な方法は、まだ一般的に尊敬されている、

Walt Disney

都合のいい故人の名誉を傷つけることである。そして、もしその犠牲者がユダヤ人の友人でないなら、『ニューヨーク・タイムズ』紙のようなヘブライ語圏の新聞で熱烈な批評を受けるチャンスは、どんな文学者にもある。このような屍姦ペンの押し売りの卑怯さは、彼らが書く人物はみな死んでいるため、自らを守ることができないという事実によって強調される。

ヘンリー・フォード、H・L・メンケン、チャールズ・リンドバーグといった白人の英雄たちの名声をズタズタにしてきた傲慢なハッカーたちは、今度はウォルト・ディズニーを次のターゲットに選んだ。紹介するまでもなく、その人物はウォルトおじさんであり、20世紀で最も普遍的に愛された人物の一人である。つまり、マーレ・エリオットがシオニストの権力者たちの機嫌を取り、生粋のアーリア人の天才の名を惜しげもなく貶めることで、印税を巻き上げようと決意するまでは。エリオットのもう一冊の著書『ダウン・サンダー・ロード』がブルース・スプリングスティーンをべた褒めしたものであることは、驚くにはあたらない。著者は白人文化の敵の一人であり、ひどく過大評価されたコーシャ・ロックンローラーの誇大広告を膨らませることによって自らの人種を売り渡し、一方で『ファンタジア』の作者のような本物の白人の英雄を、脂ぎったギャーギャー騒ぐユダヤ人の支離滅裂な歪曲のために墨で汚し、脇に追いやろうと努めている。皮肉なことに、エリオットが最も忌まわしいと思うことは、まともな読者なら誰でも拍手喝采するディズニーの人生における出来事なのである。特に国家社会主義者にとっては、この伝記の副題にあるように、「ハリウッドのダーク・プリンス」と呼ばれたディズニーは、これまで以上に高く評価されることだろう。

ディズニーへのユダヤの罠

この著者は、被写体に対する敵意（羨望？）を露わにしながらも、ウォルト・ディズニーが国家社会主義者であったという驚くべき経歴と、一般には知られていない、彼のスタジオと国のユダヤ人による乗っ取りに対する生涯の闘いを、初めて活字で明らかにした。エリオットは、ディズニーが1920年代初頭、若く無名のイラストレーターとして出発し、カンザスの家を出てハリウッドで大成功を収めようとした経緯を語る。ウエイトの最初のキャラクター、アリス（ルイス・キャロル原作）は、彼の革新的な映画技術を示すものだった。しかし、アリスを成功させるには配給会社が必要だった。当時も今も、映画配給はユダヤ人の私的な領分であった。彼らはまるで本能のように、映画の黎明期から、異邦人大衆の心に到達し、その心を形成する前代未聞の力を感じ取っていた。その結果、ミルトン・フェルドがディズニーの最初のエージェントとなり、彼はタルムードのネズミの巣であるニューヨークへの道を歩むことになった。そこで彼はマーガレット・ウインクラーの魔手にかかった。彼女は彼のアリス・シリーズの最初の配給を管理し、彼は1本につき1,500ドルを受け取ったが、制作費を正当化するには十分ではなかった。

しかし、数ヵ月後、ウインクラーは、彼のシリーズが評判が悪く、興行収入で負けているため、支払いをほぼ半額に減らすと彼に告げた。エリオットは、「ディズニーは、自分の映画がなぜもっと成功しなかったのかよりも、減額されたことのほうをずっと気にしていた。彼は、ウインクラーの決断が彼の映画の質とは無関係であることを知る由もなかった。実際、ディズニーの映画はウインクラーの厩舎の中でも成功作の部類に入り、東海岸沿いに安定したファンを作り始めていた。しかし、ワーナー・ブラザースのブッキング・エージェントだったチャールズ・B・ミンツと結婚したばかりのウィンクラーは、会社の全権をミンツに譲った。ミンツはすぐに、映画の興行収入に関係なく、会社の取引先への支払いをすべて減らした」。こうして、ウォルト・ディズニーのおとり捜査が始まった。

ミンツはある日突然ハイペリオン・スタジオに現れ、ウォルトと弟のロイに、アリス・シリーズは興味がないから中止すると嘘をついた。ウォルトは「自分のオフィスに閉じこもり、翌日も夜もそこにいて、誰とも話すことを拒み、会社の失敗を自分のせいにした」。彼が知らなかったのは、ミンツがニューヨークとハリウッドを定期的に往復し、ユニバーサル・ピクチャーズの創始者カール・レームレと、大成功を収めた『猫のフィリックス』シリーズに対抗するウサギのアニメの契約を交渉していたことだった。その契約が終わると、ミンツはディズニー家に新キャラクターを作らせるだけでなく、もしすべてが計画通りに進めば、ミンツがディズニー家を陰で呼んでいた「田舎者」（あるいは「ゴイム」? 数日後、ミンツはハイペリオンを再び訪ねた。もし彼らがオリジナルのアニメキャラクター、たとえばウサギのようなものを考え出すことができれば、彼らの契約を守ることができるかもしれない、と彼は兄弟に言った。

ディズニー映画『罠にかかったウサギ

ユダヤ人配給会社の親身な援助にすっかり騙されたウォルトは、無理をして『幸運のうさぎオズワルド』を作り上げた。オズワルドが誰にとって幸運だったかは、やがて明らかになる。ミンツは、売られた仲介人として、彼の関与していない妻のダミー代理店とも「インキエ」と契約することで、配給料の倍額を受け取り、「それによって、ウォルトとレームルの間に2つの企業ストップが生まれた」。オズワルドはたちまち大成功を収め、ユダヤ人エージェントとユダヤ人アニメに「かなりの利益」をもたらした。彼が反抗し始めたのは、ミンツとレームルがオズワルドを玩具、キャンディーバー、衣料品、その他の子供向け商品で売り出し、すべて彼の知らないところで、彼の同意も参加もなく、密かに何百万ドルもの利益を得ていたことを偶然知ったときだった。ミンツは同情するふりをし、カール・レームルというミスター・ビッグを遠ざけるような行動をとらないよう彼に説得した。

1928年2月、『オズワルドとラッキー・ラビット』がアメリカ中の銀幕で最も人気のあるカートゥーンになっていた頃、ディズニーは妻のリリアンとともにニューヨークのミンツに契約更新に出かけた。ミンツは「ハリウッドの注目の若手アニメーターに会うためにやってきたさまざまなプロデューサーや監督たちにウォルトを紹介するのをとても喜んでいた」。その日、ミンツはウォルトを五番街の派手なオフィスに座らせた。「そして、時間を無駄にすることなく、ランチの時とは違う静かで強烈な物腰で、ミンツは唯一無二のオファーを伝えた。即刻、ディズニーのアニメ1本あたりのギャラを2,250ドルから1,800ドルに減額する。それが受け入れられないのであれば、スナッピー（ミンツの代理店）がオズワルドのアニメ制作をすべて引き受けるしかない。そしてミンツはウォルトに警告し、ディズニーのスタッフを使ってそれをやると言った！(エリオットの斜体）」。典型的なイディッシュの陰謀工作は、ミンツが昼食中にウォルトにお世辞を言っているのと同じ瞬間、遠く離れたハリウッドですでに進行していた。思いがけない最後通告にディズニーが苦悩しているのを利用して、ミンツは譲歩するふりをし、スナッピーがディズニー・スタジオの50％の権利を手に入れさえすれば、ウォルトがオズワルドの権利を保持することを許可すると申し出た。それは、人間の魂の所有権をめぐって悪魔が策略をめぐらすという、永遠の物語であった。

ロイの助言により、ウォルトは自身の創作物である「幸運のうさぎオズワルド」の権利を放棄し、収入をすべて失ったが、激減したスタジオの所有権は保持した。事実上、未来への希望は盗まれた財産とともに消え去り、ウォルトとリリアンは悲しげに長い帰国の旅に出た。しかし、この憂鬱な旅路の中で、ウォルト・ディズニーの豊饒な知性の中に、大きな障害に対応するアーリア人の天才が誕生し、ミッキーマウスが誕生したのである。あとは歴史の通りである。ディズニーの指導のもとで人気を博したオズワルド・ザ・ラッキー・ラビットの運命は、彼の新しいキャラクターによってまったく見えなくなってしまった。しかし、創造主を失ったオズワルドの運はすぐに尽き、わずか数巻きで枯れ果て、忘却の彼方へと消えていった。オズワルドを通じて永続的な利益を生み出そうとしたユダヤ人たちの

努力と、ディズニー・スタジオの接収を企てた企ては無に帰し、その一方で、ウォルト・ディズニー・プロダクションは1930年代を通じて空前の世界的評価を得るまでに急成長した。

"アメリカン・ナチ党 "のディズニー

ウォルトは自分の芸術を常に見つめていたが、フエルド、ウインクラー、ミンツ、レームレをつなぐユダヤ人の共通項に気づかず、急速に拡大する自分の組織にユダヤ人を参加させたことで、ユダヤ人との生死をかけた対立を再び招くことになった。確かに、彼がまだ存続に苦しんでいた頃、ミンツの陰謀の後にカムバックできると信じる者はほとんどいなかった。しかし、ミッキーマウス以降の彼の予想外の成功によって、ユダヤ人たちは自分たちの目的のための手段として再び彼を注目し始めた。ミンツ以降にディズニー・スタジオに加わったアニメーターの中に、アーサー・バビットがいた。ウォルトは知らなかったが、バビットはユダヤ人であることに加え、FBIから共産主義シンパとして指名されていた。彼は密かに、ディズニーの従業員をあからさまなマルクス主義者である漫画家組合に加入させるストライキの下準備を始めた。なぜなら、彼の唯一の意図は、ディズニー・プロダクションを赤のプロパガンダ工場にすることだったからだ。

米国共産党が映画脚本家組合を創設し、操っていたことを（うっかり暴露してしまったが）褒め称えた後、エリオットは、共産主義者は1940年代まで「ハリウッド市民の政治化において重要な役割を果たし続けた」とうそぶく。

資本主義的ユダヤ人の手によって存亡の危機に直面したディズニーは、今度は自分のスタジオを乗っ取ろうとする共産主義的ユダヤ人と対峙することになった。方法は違えど、敵は同じだった。彼はようやく危機の正体を認識し、答えを探し始めた。エリオットによれば、"ディズニーは、業界の主流派に対抗するインディペンデント映画製作者の組織化に協力していた時期、ディズニーの弁護士であり親友であったレッシング（Gunther

Lessing）とアメリカのナチ党（中略）の会合や集会に同行していた"。アメリカ・ナチ党は1958年に設立され、エリオットが述べた出来事の約20年後である。ウォルト・ディズニーが参加した集会は、ウィリアム・ダドリー・ペリーの "シルバー・シャツ "という初期の国家社会主義組織によって行われたもので、アメリカの中立性の維持を除いては、いかなる政治的意図も持った政党ではなかった。

ストライキの扇動者であるバビットは、シルバーシャツの会合にディズニーを尾行し、彼をスパイしていた: 「戦争に突入する直前の数年間、ナチ党には小規模ながら忠誠心が強く、おそらく合法的な信奉者がいた。ハリウッドの新聞売り場で『我が闘争』を買うことができた。誰も私に集会に行けとは言わなかったが、私は好奇心から参加した。誰でも参加できるオープンな会合だったから、何が起こっているのか自分の目で確かめたかった。何度もウォルト・ディズニーとグンター・レッシングを見たし、その他にもナチスに影響されたハリウッドの著名人がたくさんいた。ディズニーはいつも会合に出ていた。私は何人かの著名な俳優や音楽家の家に招待されたが、彼らは皆、アメリカのナチ党のために積極的に活動していた。当時『コロネット』誌の編集者だった女友達に話したら、観察したことを書き留めるよう勧められた。彼女はFBIにコネがあり、私の報告書を提出してくれた」。マルクス主義者のバビットが、ナチスと戦うためなら、保守的なFBIに協力することに何のためらいも感じなかったことは、ユダヤ人のメンタリティにとって二枚舌が第二の天性であることを知る者にとっては驚きではないだろう。ディズニーがバビットを "下水道ネズミの親玉 "と呼んだのも理由がないわけではない。

ミッキーマウスか、怠け者のネズミか?

しかし、ウエイトが政治的に目覚めたのは、国家社会主義者の講演を聞いているときだった。初めてハリウッドのユダヤ人化についての事実を知り、ミンツらとのジレンマ、そしてバビットのような現在の悩みの根本的

な原因を把握し始めたのだ。皮肉なことに、ユダヤ人によるアメリカ映画産業の乗っ取りは、メア・エリオット自身の反ディズニー伝記ほど簡潔に示されているものはない。彼は、映画というものが、発明者トーマス・アルバ・エジソンが率いる完全に異邦人による事業として、世紀の変わり目に始まったことを指摘している。彼と彼の仲間のアーリア人撮影技師たちは、特に子供たちに対して、道徳的に健全で、芸術的に高揚感のある、倫理的で質の高い映画を上映する公的責任を痛感していた。

しかし、ユダヤ人の本能は、大衆の下劣な性向に訴えることで、この新しい媒体の経済的可能性をすぐに嗅ぎつけた: 「エジソンは、新世紀最初の目新しさである、ニューヨークのロウアー・イースト・サイドに最初に出現したストリート・カマー・ニッケルオデオンというアミューズメント・パーラーの突然の大流行に大いに心を痛めた。ニッケルオデオンとは、ニューヨークのロウアー・イースト・サイドに最初に出現した、新世紀最初のノベルティ、ストリート・カマーの娯楽パーラーである。1910年、エジソンは「トラスト」として知られるようになった最初の映画同盟を結成した。その目的は、ニッケルオデオンを経営しているだけでなく、自分たちで映画を作って上映している、彼が「ユダヤ人儲け主義者」と呼んだ連中が作る不道徳なゴミから大衆（そして彼自身の経済的利益）を守ることだった。これに対し、カール・レームレを中心とするユダヤ人映画製作者の独立グループは、自分たちの配給組織（エクスチェンジ）を結成した。彼らは、非合法ではあったが、効果的なアンダーグラウンドを組織し、外国の未加工のフィルムストックや機材を輸入することで、映画製作を続けることができた。

しかし、エジソンは今日の弱虫企業のような文明の利器を持ちすぎた弱虫ではなかった。彼は自らストームトルーパーを組織した。エリオットが正しく報告しているように、"彼らはニッケルオデオンアーケードを壊し、ニッケルオデオンアーケードのある地域にブロック単位で火を放った"。そ

れはユダヤ人が理解できる唯一の主張であり、うまくいった。ニューヨークは再びきれいになった。しかし、ユダヤ人は生き延びなければ何もできない。レームレ・マフィアは、「エジソンとの間にできるだけ距離を置くため」、カリフォルニアに移住した。「そこで彼らは、安い不動産、完璧な気候、3,000マイルの緩衝地帯という自然の保護を見つけた。カリフォルニアは彼らに映画製作の再チャンスを与えた。

「初期の東海岸のスタジオとは異なり、ハリウッドのスタジオのトップたちは、利益よりも芸術的な実験に関心がなかった。彼らは最も売れるものをスクリーンに映し出した。大衆はセックスと暴力に満ちた映画を見るために喜んで金を払い、ハリウッドはそれを喜んで作った。しかし、ハリウッドの支配者たちは、「社会的に受け入れられる」映画とはどういうものかを知らなかった。彼らは自分たちの映画が道徳的なのか不道徳なのか知らなかったし、気にも留めなかった。彼らにとって映画は、表現の道具ではなく、利益を得るための手段だった。映画は儲かれば儲かるほどいいのだ。業界が道徳的に堕落しているという攻撃を受けるたびに、ハリウッドのオーナーたちは誰も、その問題が道徳とは関係ないと考えていた。

「もちろん、それこそが問題だった。ハリウッドがユダヤ人によって支配されていると正しく認識していた人々の間では、政府や民間部門の多くの人々にとって、彼らはキリスト教道徳の本質を理解することはおろか、投影することもできない異教徒にすぎなかった。彼らは、ハリウッドのユダヤ人実業家たちが金儲けのために芸術を堕落させ、そうすることでアメリカの道徳的堕落を拡大させる一因となっていると考えていた。ヘンリー・フォードの言葉を借りれば、彼らはアメリカの増大する問題、つまり世紀の変わり目に流入した "国際的なユダヤ人 "の完璧な例なのである」。

ヘブライ語圏のハリウッドに反対した有名なアーリア系アメリカ人はフォードだけではなかった。ウイリアム・ランドルフ・ハーストは、「ユダヤ人にも映画業界にも友好的ではなかった」が、映画界に蔓延する堕落とマルクス主義を記録する一連の社説を掲載した。「ハーストのキャン

ペーンは議会で多くの支持を得た。議会では映画の道徳の定義が年々拡大し、性的挑発だけでなく政治的破壊も含まれるようになっていた。1929年3月、スミス・ブルックハート上院議員は、ハリウッドの悪化した状況を、「ユダヤ人の束」が率いる競合スタジオ間の、性的・社会的モラルを犠牲にした利益争いにほかならないと総括した。

ミッキーマウスと鉤十字

こうしてウォルト・ディズニーは、ハリウッドにおけるユダヤ人勢力の実態を目の当たりにし、そのベールを脱いだ。彼は芸術への関心を超えて、自分の国と文明を脅かす同じ脅威と戦いたかったのだ。公然たる国家社会主義グループの一員であることは、敵によって用意された火に油を注ぐだけであることを自覚していたディズニーは、代わりに「より立派な」アメリカ・ファースト運動に参加した。この運動は、首都ワシントンD.C.から映画の都ハリウッドまで巻き起こった戦争ヒステリーに反対する大衆のために、シルバー・シャツを含む、全米の保守派、右派、さらにはファシストや国家社会主義グループの傘下組織であった。ウォルトは確かに率直な活動家となり、全米各地で開催されたアメリカ・ファーストの大集会やラジオ演説会では、チャールズ・リンドバーグと同じ演壇に立った、

機知に富んだ彼は、イラストの中に大義を支持する隠語を忍ばせずにはいられなかった。必然的に、敵も味方もそれに気づいた：1940年6月19日の『ミッキーマウス』の漫画の最後のコマに鉤十字が描かれていたこともあった。ディズニーの "ファン "の一人が、6月19日付の記事を引用してフーバー支局長に手紙を書いたのだ。その "ファン "は、"ウォルト・ディズニーの『ミッキーマウス』の最後の部分に、2つの音符を交差させた形の非常にはっきりとした鉤十字がある "と忠告した。確かに、問題の鉤十字は、"the old cowhand "という言葉の上に配置されていることから、偶然のものではなさそうだ。熱心な乗馬家であったディズニーは、週末に乗馬

をする仲間たちの間でしばしば自分のことを「老牛飼い」と呼んでいた。この漫画はおそらく内輪のジョークとして描かれたもので、ウォルトは、たとえ隠語であったとしても、自分が国家社会主義者であることを示すことができる唯一の公的な場所だと考えていたのだろう。

一方、バビットのストライキは、主要なアニメーターを流出させ、彼のスタジオに打撃を与えていた。ユダヤ人共産主義者のストライキ参加者は、ハリー・コーンの "スクリーン・ジェムズ "社の社長フランク・タシュリンのような、何らかの方法でディズニーを支配しようとするユダヤ資本主義の映画界の大物たちと手を組んでいた: 「タシュリンと最初に契約したのは、ディズニーで最も若く有望なアニメーターの一人であるデヴィッド・スウイフトだった。ウォルトがスウイフトの退社計画を知ったとき、そのアーティストによれば、『彼はついに私を呼びつけ、ニセのユダヤ訛りをつけてこう言った。そこがお前の居場所なんだ、あのユダヤ人たちのところに』」。

トップ・ユダヤ人がディズニー・スタジオを押収

自国がユダヤ人の利益解放のための戦争に陥るのを防ごうとしたディズニーの努力は、真珠湾攻撃の直後に突然終わりを告げた。彼のスタジオは米軍に接収され、彼は、反ユダヤ主義という許されざる罪を犯したドイツ国民を清算するための血で血を洗う "モーゲンソー計画 "の立案者である財務長官ヘンリー・モーゲンソーによって、プロパガンダの短い題材を挽回することを余儀なくされた。ウォルトはロイとレッシングに、ウォルトの言うところの "あのユダヤ人 "を、単なるアドバイザーとしてではなく、すべてを仕切りたがる完全なパートナーとしてスタジオが受け入れざるを得なくなったことを苦々しく訴えた。ウォルトにとって、スタジオは今やモーゲンソーのメッセージをディズニーのメッセンジャーが伝えることで機能していた。あるときディズニーは、自分の愛するキャラクターたちの

ことを、ストロンボリのようなモーゲンソーのためにたくさんの小さなピノキオのような演技をさせられている捕虜だと言ったと言われている。

しかし、ユダヤ人によるディズニー・スタジオの占拠は短期間で終わり、1943年に軍は撤退した。その後もウォルトは、芸術や娯楽メディアに共産主義者が入り込んでいるという政府の様々な調査に対して証言するなどして、台頭するマルクス主義との戦いを、たとえ無益であったとしても続けた。しかし、少なくとも彼が生きている限り、ユダヤ人がディズニー・プロダクションに足掛かりを得ることは二度となく、彼の名前は大衆文化の代名詞として世界中で評価され続けた。

ネズミに蹂躙されるディズニーランド

1966年に65歳で死去した後、スタジオは相続人に引き継がれた。彼らのいさかいと無能は、ディズニーの製品と会社を急速に衰退させ、彼らの芸術的・財政的遺産に危険な危機をもたらすと同時に、旧敵に新たな可能性をもたらした。「背が低く、丸い男で、目は弾痕があり、黒髪で、ある仲間は彼の心ほど黒くはないと表現した。スタインバーグを惹きつけたのは、ディズニー株の価値が下がり続けていることだった。スタインバーグは、経営難に陥ったディズニー・スタジオを買収し、映画ライブラリー、バーバンク・スタジオ、アミューズメント・パークといった個々の資産を売却することで、1株100ドル相当、つまり投資額の2倍以上の莫大な利益を得ようと考えたのだ。

しかし、スタインバーグは、ディズニー・プロダクションの衰退という個人的なチャンスの腐肉臭に引き寄せられたジャッカルの最初の一匹に過ぎなかった: 「ディズニーの動向は、ウォール街の新種のアービトラージャーの注目を集めた。一夜にして、そのようなアービトラージャーの一人、アイヴァン・ボースキーがゲームに参入した。彼の目的は、スタジオ

を買収することではなく、スタインバーグ、ロイ・E・ディズニー、そして彼自身の、突然の大規模な買収によって当然予想される株式価値の上昇に乗ることだった。こうしてボースキーは、ウォルト・ディズニー・スタジオの第4位の株主となった。

結局のところ、最終的にどちらのスカベンジャーが後を継いだかに違いはなかった。勝利したジャッカルはマイケル・アイズナーで、反ナチス映画『レイダース / 失われたアーク』、人種混血映画『An Officer and a Gentlemen』、あからさまなボリシェヴィキ映画『Reds』などの「大作」を配給した。芸術的にも道徳的にも問題があったにせよ、経済的には成功したこれらの映画をもとに、ディズニー取締役会は、ソウル・スタインバーグへの3億2500万ドルの「グリーン・メール」支払いで意気消沈し、アイズナーがスタジオのトップになることを許した。アイズナーは、パラマウントの重役であったジェフリー・カッツエンバーグやリチャード・フランクのような "選ばれし者 "たちにディズニーの門戸を開き、ウォルトによって制定された高水準のプロダクション・バリューを大幅に削減し、大規模なレイオフによってスタジオを財政破綻から救った。

ディズニー・プロダクションは確かに経済的には立ち直ったが、芸術的には回復しなかった。"しかし、歓声の中に埋もれていたのは、多くのディズニーのベテランたちの不満の声だった。特に古参のアニメーターたちは、スタジオがほとんど完全にコンピューター化されたアニメーションのスタイルに不安を感じていた。ウォルト自身は技術革新が大好きだったが、多くのベテラン・ディズニー・マンたちの間では、スタジオがその創造的伝統、つまりストーリーテリングのための手描きアニメーションの技術を放棄してしまったという思いがあった。新作は、より優れたオリジナル作品の薄っぺらい焼き直しにしか見えないと、彼らは不満を漏らした。ある長年のディズニー・アニメーターは、大きくなったり小さくなったりするモチーフの『Honey, I shrunk the kids』は、『不思議の国のアリス』のリメイ

クに過ぎないと主張した。あるベテランのストーリーマンは、ロジャー・ラビットのキャラクターがウォルトのオリジナルのオズワルドに酷似していると指摘した。

もちろん、今日のディズニーの再パッケージ製品の無個性化と当たり障りのない一般的な品質の背後にある本当の理由は、新しいコンピューター技術ではなく、彼らの同類が思い描いたり構築したりするのに十分な創造性を持たなかった巨大なディズニー帝国を現在支配している顔の見えないビジネスマンにあるのかもしれない。識別可能なアイズナーでさえ、もういない: 「ビル・クリントン大統領がキャピタルゲイン課税の強化を約束したことを警戒してか、（彼は）ストックオプションのほとんどを現金化し、1億9200万ドルの小切手を手にした。

「バーバンクの居酒屋で、ディズニーの映画製作チームの一人の息子が、スコッチとソーダを酌み交わしながら座っていた。彼は頭を振って一口飲み、背もたれにもたれかかった。ユダヤ人が自分のスタジオで大儲けしていることを、ウォルト爺さんはどう思うだろうね」。

世界で最も偉大なアニメーターの最新の伝記はそう締めくくられている。そのカバーアートは、彼の写真が不吉な横顔の影を落としているのが特徴で、明らかにウォルト・ディズニーのものと思われる。しかし、カブトムシのようなお辞儀をし、貪欲な口を開け、鉤鼻をつけたその姿は、『白雪姫』や『海底二万里』のアーリア人の生みの親とは似ても似つかない。

NS KAMPFRUF

KAMPFSCHRIFT DER NATIONALSOZIALISTISCHEN DEUTSCHEN ARBEITERPARTEI AUSLANDS – UND AUFBAUORGANISATION

Der Kampf geht weiter !

TROTZ VERBOT– NICHT TOT !

N.S.ニュース速報A
www.nsdapao.org
#1005 19.06.2022 (133)
NSDAP/AO: PO Box 6414 - Lincoln NE 68506 - USA

フロントレポート
モリーへのインタビュー
第3部

NSK: 現在のプロジェクトは、明らかに哲学的で、アートに関連したものですね。

このような話題が政治に与える影響について、あなたの考えをお聞かせください。

モリーです。フォトギャラリーの更新は続けていますが、主にAdolf Hitler and the Army of Mankind (www.mourningtheancient.com/truth.htm)に集中して取り組んでいます。現在21ページですが、まだまだやることがたくさんあります。第二次世界大戦の勉強は、まさに情報の地雷原です。1つのことについて情報を探しても、さらに2つほど調べたいことが出てくる。まるで、埋も

the NEW ORDER

The Fight Goes On !

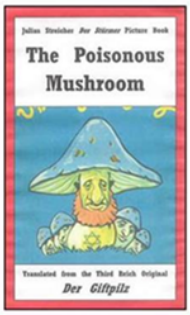
TROTZ VERBOT– NICHT TOT !

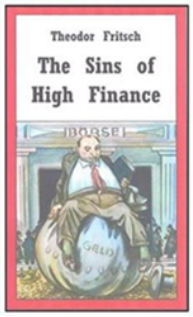
NSDAP/AOは世界最大です
国家社会主義プロパガンダサプライヤー！

多くの言語での印刷物およびオンライン定期刊行物

多くの言語の何百冊もの本

多くの言語の何百ものウェブサイト





BOOKS - Translated from the Third Reich Originals!
www.third-reich-books.com